

---

# 雪の花と白銀の刃

ケイロン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪の花と白銀の刃

### 【Nコード】

N6084Z

### 【作者名】

ケイロン

### 【あらすじ】

人々は怪物に攻められ、戦争が起きた。大地は汚染され、人々は『半地下都市』で暮らすこととなった。ディールブルに對抗する『力』を人々は手に入れた。

大切な人を失い『力』を手に入れた少年、雪平誠はこの世界で何を見るのだろうか。

主人公は最強にする予定ですが、少し苦戦する程度になると思います。

## プロローグ ある哀しい男の夢（前書き）

プロローグです。かなり意味不明な感じになってしまいました。

## プロローグ ある哀しい男の夢

遠い遠い雪国の夢を見ていた。

「さん、そんな所で寝ていると風邪をひきますよ。」

黒髪が腰に届くほどある周りの雪の様な驚くほどの白さの肌をした少女が目の前にいた。

「ん？ああ、すまない。おはよう、雪香<sup>ゆきか</sup>。」

声から察するに俺は男みたいだ。

「おはよう、じゃないですよ。こんなに雪が積もって。」

そう言っただけで彼女 雪香 は俺の頭の雪を払った。俺はだれなんだ？ここはどこなんだ？そんな俺の疑問を無視して進んで行く。

辺りを見渡すと一面真っ白だが、かなり広い庭園みたいだ、そして俺は縁側の様などころで脚を投げ出して寝転がっていた。

「それでは さん、私は少し出掛けきますね。」

・・・ダメだ、ダメだ、行ってはいけない。

「んじゃあ、俺はのんびり過ごすよ。」

なぜかそう思ったが、俺の身体は笑顔で彼女を送り出していた。なんでそう思うんだ？でも、後悔する。そんな気がする。絶対に止めない。

・・・行くな！行ったら。

## ブログ ある哀しい男の夢 (後書き)

不定期投稿になりますがよろしく願います。

## 喪失と力（前書き）

後もう少しで戦闘場面になる予定です。感想、疑問点があればコメントください。

## 喪失と力

辺りには血だまりと赤黒くなった『人』だったものが散らばっていた。

「何だよ… 何なんだよ！」

周りで起こったことを認めたくなくて俺は叫んでいた。

目の前にはねじ曲がった角、毛が筋肉質な身体を覆っていた。目は獐猛に光り、大きな爪のついた手から血を滴らせていた。

『ディーブル』

ソイツは人々からそう呼ばれていた。

ディーブルは、突如現れたわけではない。昔から人々の暮らしの隙間の闇に潜んでいた。東洋の国では妖怪やアヤカシと呼ばれるものだ。

だが、ディーブルもその頃は、それほど強大ではなく、闇にひっそりと隠れていた。

しかし、何のためにか人類に攻撃を仕掛けてきた。2020年に始まった戦争は、10年にも及び、辛くも人類の勝利だった。その一方で、戦うすべての無いものは殺され、人口は、世界で最も多かったときの六割となってしまうた。

地上はディーブルが

徘徊し、大地の大半は汚染され地下で暮らす人々がふえていった。

『半地下学園都市エデン』あらゆる学校が集合し、形成された地下都市の一つである。しかし、全ての住民が学生のわけではなく、卒業してもそのまま残る人がほとんどである。

俺、雪平誠ゆきひらまこともこの都市の第二普通科学校に通っている。今日は日曜日で両親と買い物をしていた。男子の友人と途中で会い楽しく買い物をしていた。さつきまでは。

「父さん、母さん、みんな？」

誠の呼び掛けに答える者は誰一人いない。

「Uooooooooo！」

目の前の化物が口から血肉を飛ばしながら雄叫びをあげた。むせ返すような血生臭さだ。

「・・・何でだよ・・・お前は・・・お前はあぁっ！ 殺す！ 殺す殺す殺す！」

誠の身体から美しくも鋭い光で覆われていた。

「こちら、ディール対策本部総司令官神有だ。つい先程少年がギガス型ディールを撃破したところを目撃した。そうだ、ユニークと断定できるだろう。少年は現在気を失っており、このまま本部に搬送しようと思う。ああその通りだアリス。この少年がいい戦力になることを願おう。」

本部の副司令官アリスとの電話を終えた神有美月<sup>かみありみつき</sup>は少年の頬を撫でた。

「全く、どうしたらこんな風に殺せるの。あなたはもしかして英雄？それとも救世主？」

身体中を氷漬けになったギガスを見、そう呟いた。

「もしもし榛名？」

「うん、何、兄さん？」

誠は携帯で妹の雪平榛名<sup>ゆきひらはるな</sup>に電話をかけていた。

「いや、あのさ、これから家に帰ろうと思うんだけど帰ったら大事な話をする。」

「大事な話？・・・うん、わかった。何の話かわからないけどかなり大事なんだね。」

妹はまだディールが入り込んでいたことを知らないようだ。妹とは、血が繋がっていないが、お互いの事は信頼していた。

「それじゃあ切るからね。」

「うん。」

誠は深いため息をつき、家に向かって歩き始めた。



あの後、誠は対策本部に搬送され目を覚まし、自分にディールを倒すための『力』があることを知らされ、対策室に入隊することになった。妹に会って両親たちが殺されたことを話すため一時的に対策室から出てきていた。

「普通は一般人に対策室のことを詳しく話すのは禁じられているんだけどな。」誠は家の前で独り言を呟っていた。

「ただいま」ドアを力なさげに開け、目の前に榛名がいることに気付いた。

「お帰り・・・」誠と一緒に両親たちがいないことに気づき、自然と兄が言いたいことを察した。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

二人ともなにも言わず居間にあるソファーに向かい合って座った。

「・・・・・・・・父さんと母さんは・・・さっきディールに殺された」

「・・・・・・・・っっ！」榛名は予想はしていたがディールの単語が出た瞬間、榛名の身体は強張った。

「何で？何で！対策室の人たちがディールから私たちを守っているんじゃないの！」榛名は兄に聞いても意味がないことを分かっているが兄に怒鳴って尋ねた。

「・・・・・・・・討伐漏れだそうだ。」

「・・・・・・・・討伐漏れ？」兄から答えが帰ってくるとは思っていなかった榛名はさっきまでの怒りより驚きがうわまった。

「それ、どういうことなの？何で兄さんが知っているの？」

ああ、そう言うことか、兄は『力』を手に入れたんだ。だから今生きて目の前にいるんだ。

榛名は兄が対策室に入ることを悟った。

「俺は『力』に目覚めた、だからディール対策室に入ろうと思う。そして俺達のようなやつをつくらないために頑張りたい。」

兄は確固たる決意を宿した目で自分の意思を話した。

「・・・わかった。兄さん、これから言うことを約束して。」榛名は兄とずっと離れたくない気持ちを無理矢理押し殺し、口を開いた。

「絶対に死なないで。絶対にっ……」

途中から涙がこみ上げて来て兄に抱きついた。

「死なないで。絶対にっ……」

誠は涙に濡れ崩れても綺麗な顔立ちの妹を優しく抱き締めた。

「ああ、俺は絶対に死なない。」

「……………」

「……………」

どのくらい経ったかわからないが涙が収まった妹を抱き締めるのを止めた。

「…………もう一つ約束して。」

「ん？何だ？」

「暇なときでいいから連絡をして。」

「わかった。なるべくするよ。」

この後、誠たちは夜遅くまで今までとこれからを話し合った。

「兄さん、それじゃあちゃんと約束守ってね。」

「勿論だ。俺がいままで榛名とした約束を破ったことがあったか？」

二人とも昨日で両親たちが死んだことに吹っ切れ、笑顔で別れの言葉を言っていた。

「そろそろいい？もう時間なんだけど。」

美月是对策室のロゴがはいった車の助手席から顔を出し、二人のやり取りを微笑ましく見ながら告げた。

「すみません、神有司令。」

誠は笑顔のまま答えた。そのまま車の後部座席に乗り込みドアを

閉めた。

「ちゃんと約束守ってね〜！」

手を振る様名に窓から手を振り返し、窓を閉めた。

「かわいい妹さんじゃない。」

「ええ、自慢できます。でも俺がいない間の悪い虫が付かないか心配ですよ。」

「それは大丈夫じゃない。」美月は、意味深な笑みを浮かべた。  
「？」

そんな事を美月が思っているなんてわからず首を捻っていた。

ブロロロ…キィ！車が半地下都市の『天井』と言える場所まで登り『ディール対策本部』とかかれたかなりデカイ建物の前で止まった。

「ようこそディール対策本部へ！…といっても昨日ここに搬送されたんだよね。」

「いえ、昨日は頭が混乱していてよく覚えていませんでしたから。」

誠はこの建物の大きさに驚きながら答えた。

車から降り、筋肉がよく付き、体格の良い門番二人の間をとおり、建物の中に入り対策室の説明を廊下を歩きながらした。

「まず対策室は世界中にありこの対策室はそのなかでも、最も規模が大きいものの一つよ。まあここはユーリア大陸の対策室の本部だしね。」

「でも何で学園都市のここが本部なんですか？普通、本部とかって大人が多くいるところになりそうな気がするのですが。」

「そうね、他のオーリア大陸、ノーアメリ大陸なども大人が多いところが本部なのは事実。でも学生だから弱いというわけではないの、それに危険を犯してまで守りたいものがある人は大人も子供も関係なく強いのだ。」

誠は十六才である自分より少し年上の筈なのにその言葉はひどく

大人に聞こえた。

「さて、もう着いたわ。」

少し大きめの扉の前で止まり、準備はいい？という視線を美月は誠に合わせ、扉を開けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6084z/>

---

雪の花と白銀の刃

2011年12月20日20時57分発行